

人口減少、高齢化社会、経済縮小が顕著となるであろう近い将来に、どうしたら地方都市が生き残れるのか、どうしたら市民が幸福に生きられるのか、どう発信すればインターネット時代の情報の渦中でも存在をアピールできるのか、日本中が試行錯誤をしています。

世界中が同じような服をまとっているかのような昨今あって、自分の町にしか存在しない生活文化や美意識が息づいていることは、かつてないほど価値あることになってきたのです。地方にしか存在しない固有の地域資源情報をどう発信していくか。それが、幸福で心豊かなまちづくりのために、きわめて重要な意味を持つ時代がやって来たのだと思います。

「はっち」は、画期的なシステムです。観光、文化、ものづくり、子育て、高齢者福祉、教育、さまざまな人々が、ひとつの箱の中でミックスされるのです。異ジャンルとの接触で、私たちはさまざまな発見や発明という恩恵に恵まれるのです。

今、閉塞感にさいなまれる山間地の集落や離島、空洞化に悩む都市で、一見何の役にも立たなそうな現代アートが、活力を生み出しています。アーティストたちは、その場所であれば成立しない作品を考え出し、これまで出会うことさえなかった人と人との間にコミュニケーションを紡ぎ出し、

だれも振り向かなかった地域資源に目を向けさせます。彼らの活動が、住民や訪れる人々に、驚きと発見と喜びをもたらすのです。美術館や文化ホールで親しんできた芸術ジャンルとは異なる、市井にあって初めて成立するような新しい芸術活動が世界のあちこちを元気にしています。

画期的なシステム「はっち」は、八戸というまちに生きる人々が、自らのまちへの誇りを再確認し、未来に向けてイキイキと創造しあうフィールドワークの場だと思えます。そこで、アーティストと八戸市民は協働を始めたのです。

「八戸レビュー」では、八戸に生きるひとりひとりの人たちの輝きを再確認しました。「八戸のうわさ」は、中心街のお店や事業所を切り盛りしている人々の素顔をいきいきと見える化しました。「デコトラヨイサー」では、トラック野郎たちの美学と伝統的な八戸の祭の造形美が緊密な関係にあるという発見だけでなく、トラック野郎たちの心意気が八戸の水産業を支えてきたのだという気づきをもたらしました。市民とアーティストたちとの協働が、八戸を見つめる新たな視座と感動、八戸への新たな関心を生み出しているのです。

はっちのアート・プロジェクトは、これからも、八戸で生きてきた幸せを確認し、ここで生きていく喜びを共有していく「しかけ」でありたいと考えています。

吉川 由美



文化創造事業の戦略スキーム

